

春燈



December 2009

12

主宰の句

安立公彦

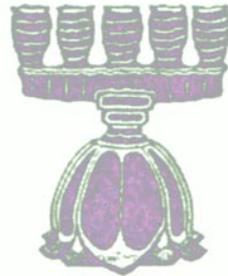
秋風や「号」もて呼ばる古墳群

石ひとつつ秋の余光を抱きをり

待宵の太宰旧居に女ひと（船橋）

眷恋や霧に灯点る窓ひとつ

曼珠沙華暮光に朱けを委ねけり



燈下集



○ 小張 昭一

万年橋袂色増す百日紅
色無き風大正澱む船溜
赤とんぼ江戸西詰の六地藏
ひげ振つて寵馬にも居住権
少しづつ月ふくらませ葉月潮

○ 鈴木 鳳来

冬瓜のどつしり縁に南洲忌
虫の声闇美しくなりにけり
木の実降る羅漢も地藏も石頭
蓑虫や天地無用の荷が届く
女郎花群れゐて淋し法師の湯

○ 松本 峰春

○ 萩原 すみ

庭番の真正直や草を引く
庭番の額の敏に汗の玉
笑顔には笑顔でこたへ敬老日
採血につむる眼や原爆忌
父の顔となりたる医師よ運動会

○ 松本 峰春

八朔雛飾つて格子の粗き家 (播州室津 四句)
八朔雛飾り土間より海の見ゆ
海へ向く八朔雛や蟹の家
遊女墓に執着の一赤蜻蛉
この芒野越ゆれば父祖の墓ある在

○ 中野英伴

嘘ひとつ吐いて負ふ罪いわし雲

この道と決めしすきに埋もれゆく

露を往くひとりありけり墨衣

飾らずに生き来し仰ぐ銀河かな

秋の夜やそに問ふ文の墨匂ふ

○ 木村傘休

医師の話妻と聞き入る秋暑かな

入院の日数を思ふちちろかな

繰上げて母の忌修す秋桜

山房に一灯ともる良夜かな (五大夫邸)

一本の松風高き十三夜

○ 加藤良子

新涼や今日の始まる顔洗ふ

風生の富士の百句や天高し

子規小園ささやきながら萩と人

蘭一本子規愛用の机かな

疎開地の友の便りや敬老日

○ 池園二三江

潤目鱒即ちDNAを食ふ

秋日和作務衣は洗ひ晒しにて

竹の春ちぎり蒟蒻味淡し

茶の花や胸元さやに稽古帯

星月夜二歩三歩足おぼつか

○ 鈴木静恵

越後三山朝日に映ゆる芒かな

経石の参道踏むや露しぐれ (雲洞庵)

露の寺千古の杉に思惟ふかむ

高稲架や八海山を遥かにす

長き夜や旅の興そへかじか酒

○ 菊地瑩子

シベリウス?いいえ潮騒よ秋風よ

星月夜空よりにほひ降るごとし

須賀川で子と見し銀河以後は見ず

晩鐘の花野を渡るときが好き

ゆめ美し白き柩よ花野路よ

○ 鈴木直充

初嵐詔状を書き上げにけり

秋のこゑ麴麴屋のパンに囲まれて

秋あふぎ遅参の卓に置きにけり

草雲雀うから遠のくばかりなり

稿の枷はづして月を待ちにけり

○ 高橋和女

踊の輪哀しき唄を賑やかに

波音を妙法と聴く須磨の秋

萩日和木椅子にひらく詩篇かな

燕去ぬはつかに草の黄ばみけり

晩学に「亡羊の嘆」いわし雲

○ 上野昌子

秋の逢魔が時門出でし猫匆ねしは吾か

尾を立てて去る描くがね秋の翳

今見しは抜けゆく魄か秋彼岸

句会遅しと空腹の猫癩祭忌

猫の顔みせ紅芙蓉もて埋めつくす

○ 和田孝村

秋澄むや牛の鼻紋の潤へる

控へ目といふ佳き言葉吾亦紅

鬼灯市虫喰ひ鉢を値切つて買ふ

政権交代夕顔の白極めたる

難聴の耳が捕へし秋の声

○ 中村喜美子

重陽の雲動き出す俄雨

秋暑し疲れを知らぬ児に疲れ

再会の声の弾みし花野かな

澄める水見つめ言葉を運びけり

不知火やまだ見ぬ国へ思ひ馳す

○ 乗鞍三彦

白芙蓉言葉かへすをつつしめり

秋暑し鴉がからす呼ぶ真昼

鬼の子の火の見櫓をのぼりをり

あし音の遠退き虫の鳴きはじむ

曼珠沙華小径のさきのをんな塚

○ 柴崎 甲武信

酔芙蓉をんなに失せし差恥心

桐一葉落ちゆく先を定め落つ

還らざる四島一望初秋刀魚

昭和史をいつたりきたり夜長酒

別れ蚊の最後の晩餐ともわが血

○ 岩谷 丁字

字と付く友の宛名や残る虫

落書に傑作のあり文化の日

九九止めて電卓頼る文化の日

とめどなき外地綺談や月の宿

マスゲーム逆を向く子や秋日和

○ 宇賀 令子

萩盛る目あての家の若き人

昨日より遠きに散歩菊日和

月天心話しばらくときれたり

十月歌舞伎千秋楽は玉三郎

折々の想ひ出秋の歌舞伎座に

○ 近藤 牧男

回覧板の反りの戻らぬ終戦日

昼閑かどこ曲つても盆の町

長き夜の膝を払ひに立ちにけり

影に尾の生えてきさうな月夜かな

少しづつ失ふものに月ひとつ

○ 吉澤 恵美子

法師蟬夕日の中の挽歌かな

雲は秋みじかく病みて友逝けり

どんぐりを風に拾ひし賢治の忌

敬老日シベリヤのことすこし言ふ

やや寒の仏の花をむらさきに

○ 卜部 黎子

法師蟬切れ字ふまへて鳴き止みぬ

エンタシスの母校図書館鳥渡る

失投の一球悔やむ鱗雲

八朔やグルメ志向の五穀米

零余子落つ不揃ひの影こぼしつ

春星賞受賞作（20句）

スナップショット 矢口 笑子

駅前の監視カメラやサングラス

鬱の字の混み合つてゐる暑さかな

愚痴言ひにアイスクリーム提げて来し

その後の話長引く扇風機

夕焼や送りがてらの小買物

マネキンの笑ひ疲れし夏の果

四次元の入口覗く熱帯魚

激辛カレー ト日の汗を拭ひけり

ががんぼや火曜の夜のサスペンス

気掛りのひとつふたつや浮いて来い

灯に寄るは人恋ふに似て夜の秋

火蛾打つて今日の憂ひは持ち越さず

ビル街に蟬の一声雨上がる

交番の英語マップや百日紅

蝸牛枝移りの角伸ばしけり

振り向いて構へし斧や子蝸螂

天道虫背負ひし星の軽からず

壊してはまた建つビルや日雷

さりげなく踏んばつてをり水馬

日盛りや鴉の狙ふ猫の餌

当月集

安立 公彦選



○ 北岸 邸子

黄落や天満天神古書の市

メトロ出て釣瓶落しの御堂筋

冬瓜の包丁しかと唧へたり

夫無しの夫の句詠まず夜のちちろ

丹波平野粉焼くけむり真直に

○ 荘司 正代

すれちがふ人も落葉の風連れて

つながらぬ記憶のつぎ目赤とんぼ

あした葉のみどり確かに老ゆまじよ

夕やけを集めて流す神田川

たんぼばや原つばに來て風を抱く

○ 石田 康明

胸になほ月は居待の軛の浦 (対潮楼)

たとふれば良夜に送るかぐや姫

その後は無月の竹取物語

団栗の夜攻め夜すがら峡の宿

人肌に流謫の島の温め酒

○ 今井 弘雄

山裾の風湧くところ花芒

十六夜や大和の国の石舞台

野にあらば鳴きたきものを檻の鹿

山影に灯のともりたる烏瓜

十三夜男もすなる首飾

○ 竹内 慶子

初秋や言葉少なの人とぬて

月見草うすくれなぬに果てにけり

初鴨の運河に遊ぶ日和かな (利根運河二句)

秋うららとんがり帽の時計塔

大皿の餃子平らげ良夜かな

春燈の句

安立 公彦選

黒潮の香ももろともに鰹釣る

東京 入澤 正

大漁の船傾ぎ合ふ秋刀魚漁

星の喝采通草の熟るる夜なりけり

蜻蛉とんで母の十七回忌かな

千曲川薄の波の光りけり

神奈川 松山三千江

妹の守る兄の青春われもかう(無言館)

蓮の実の飛んで極まる池の黙

湯殿への長き廊下や居待月

山盧忌に近き川音風となる

爽やかに阿修羅細身でありにけり

追はるるをたのしむさまに稲雀

縦大樹聳えし里や秋収め

秋麗や聖堂の扉の蝶番

神奈川 宮崎 紗伎

海よりの風を定かに焼く鰯

蓑虫に夜明けの風の青臭し

足裏を火照らせて行く枯野かな

風往なし雨をいなして女郎花

あをあをと蔓にひかるる鳥瓜

橋に来て花野尽きたり水の音

青すすき地図なき道を行きにけり

聞き上手の亡き父なりき新酒酌む

桐の実のからから鳴るや明日は晴

青北風や中高年のバスツアー

くわりんたうがりつと囁んで秋深む

籠居の耳さとくなる落葉どき

タワ一の灯旅愁のごとし秋の暮

晩年を諾ふ秋刀魚焼きにけり

黄落といふ喝采の中あゆむ

東京 安藤 利恵

東京 豊谷ゆき江

千葉 海村 禮子



余言

安立公彦

一本の松風高き十三夜

木村 傘休

この句の前に、〈入院の日数を思ふちちろかな〉という句がある。作者は現在病いのため入院加療中。〈繰り上げて母の忌修す秋桜〉の句とともに、腰を据えて病氣に對う思いが淡々と表現されている。

初老とは何歳くらいからを指す言葉か。辞書には四十歳の異称とある。しかしそれは昔のこと。現在では華甲からと言いかえてもよからう。それは作者の今の年齢である。まだ壯齡と言つてよい。充分な治療を願っている。

掲出句。「十三夜」の句にはどうしても情緒がまどう。しかしこの句の「一本の松風高き」はいかにも潔い。それは対象肯定の姿勢であり、俳句の基幹を成すものである。

十六夜や大和の国の石舞台

今井 弘雄

大らかな句である。唱していると、中七から下五に至る調べが、豊かな情感を以て語りかけてくる。「十六夜」と地名を組み合わせた句は、例えば、〈十六夜もまだ更科の郡かな 芭蕉〉、〈十六夜や鯨来初めし熊野浦 蕪村〉、などの古句が思い浮かぶ。さすがに印象深い句だ。

作者の句は、地名と古墳名のみを「十六夜」と取り合わせ、動詞はない。動詞のない句はどうしても一句の形が固くなる。しかしこの句は、「や」の切字、「の」のリフレインにより、みごとなりズムを得ている。

一般的にこういふ旅吟は、安易に詠むといわゆる月並な觀光俳句となる。この句のように、季語を含む作者の感動がもたらした言葉の選択あつてこそ、鑑賞に値する句になるのである。

黄落や天満天神古書の市

北岸 邸子

「天満天神」は菅原道真の霊を神格化した呼称であり、またそれを祀る神社をも言う。北野天満宮、太宰府天満宮など。道真が書の三聖（空海、道真、道風）の一人ということは良く知られている。その天満宮で古書市が立つ。いかにものびやかな風景である。

つながらぬ記憶のつぎ目赤とんぼ

莊司 正代

物忘れ度忘れは加齢とともに人体に棲みつくもののように。作者はそれを、「つながらぬ記憶のつぎ目」と表現する。まことに言い得て妙。その通りの現象だ。

現在「春燈」の会員の中では、百二歳の中根巳沙さんにつぐ九十七歳のご高齢。しかし作品にはいささかの老いも感じられない。同時発表の、へすれちがふ人も落葉の風連れて、へ夕やけを集めて流す神田川など情景がよく出ている。この句、「赤とんぼ」が点景ともなり、同時に「記憶」の支えともなっている。何よりもプラス志向の一句の表現がいい。

人肌に流滴の島の温め酒

石田 康明

「流滴」は、罪により遠方に流されること。いわゆる流人。そういう流滴の島は数々の伝説を伴って各地に残る。

「温め酒」もまたいい季語だ。陰曆九月九日（今年は十月二十六日）は「重陽」の日。その行事の一つに「登高」があり、「菊酒」がある。重陽の日は寒暖の境目とされ、この日から、酒は温めて飲むのが病いにかからない一法と言われて来た。季語一つにも、言葉一つにも深い意味がある。作者はそれらをしかしきり気なく一句に採り入れ、余韻の深い句に仕立てている。

地酒酌むかりがね寒き北近江

片山 博介

舞台は近江に移る。「近江」、「淡海」。語感のいい地名だ。日本の文化と文芸を育んで来た「あふみ」。芭蕉もこの地をこよなく愛した。瀬田、石山、粟津、三井、唐崎、堅田、矢橋、比良と、天下に知られた近江八景は湖南に集中している。作者はあえてそういう伝統的な景勝の地を避け、「北近江」を詠む。この句の成功した一因である。

季語について。「雁」は秋季、「寒し」は冬季。しかし歳時記には「かりがね寒き」という仲秋の季語が登録されている。雁が渡ってくる時期の寒さを言う。

風騒ぐ神話の里の茸飯

矢口 笑子

天孫降臨の伝承の地、高千穂峽を探勝した五句の一つ。天岩屋戸という洞窟をご神体とする天岩戸神社では、十一月に岩戸夜神楽が立つ。近くには、天照大神が天岩屋戸に隠れたことを案じ、神々が集まったという天安河原（あまのやすかわら）もある。全ては神話の世界を今に再現させる名勝・天然記念物の地である。

作者はこの神話の里に、「風騒ぐ」を配した。この地に立つと、今でも敬虔な身の浄化を憶える。「茸飯」の季語もい。神話の里とつかず離れず、一句をさり気なく支えている。この首は岩茸か初茸か。